

2014年におけるサンマの漁況について

○ はじめに

「秋の味覚」の代表として知られるサンマですが、2010年以降は水揚量が少ない状態が続いています。昨年（2013年）はさらに低下して、全国の水揚量が14.8万トンと前年比68%にとどまり、1981年以降では1999年（13.5万トン）と1998年（14.0万トン）に次いで3番目に低い量でした（図1、全国さんま棒受網漁業協同組合の調べ）。このことが新聞・テレビなどの報道で大きく取り上げられたこともあり、今年（2014年）の漁模様は非常に注目されていました。このため、ここでは、今年の漁況の概要について紹介します。

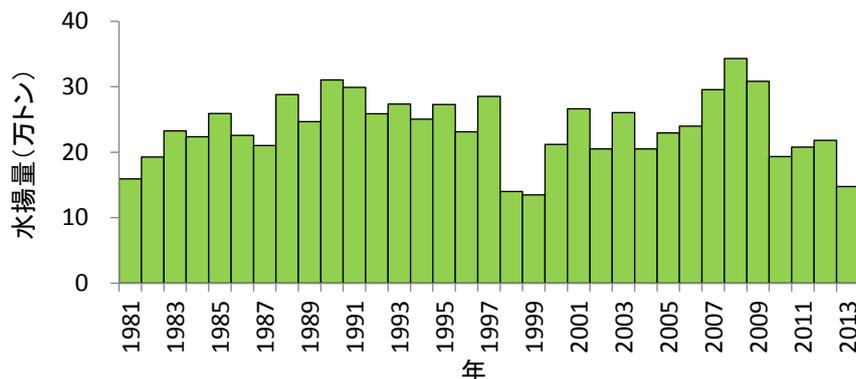
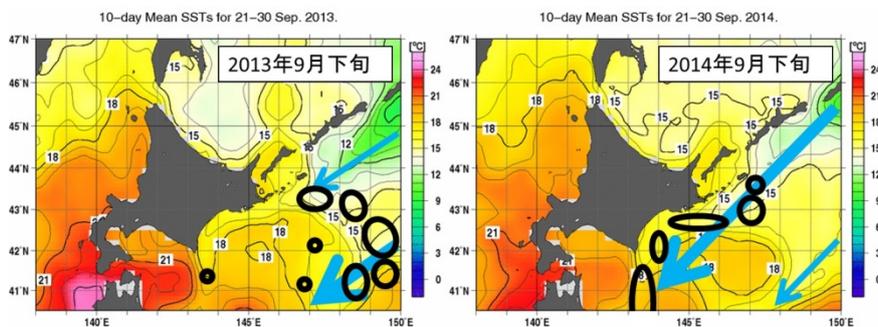


図1 サンマの全国水揚量（全国さんま棒受網漁業協同組合の調べ）

○ 2014年の漁期前調査と長期予報について

釧路水産試験場と（独）水産総合研究センターがサンマの漁期前調査を行ったところ、2014年の漁期前では、2010～2013年と同様に太平洋の日本寄りの海域にはサンマが少なく、前年と異なり大型魚の割合が高いことなどが分かりました。これらの調査結果を基に、水産庁からは「日本近海への魚群の来遊が遅れ、8月の漁況は低調であるが、9月には上向く。漁期を通して大型魚の割合が高い。」との長期予報が発表されました（平成26年度北西太平洋サンマ長期漁海況予報、2014年7月31日水産庁プレスリリース）。



○ 2014年の漁況について

長期予報発表後の8月以降、漁模様は以下に示す通りでした。

サンマは北からの寒流である親潮に沿って南下して、例年8月下旬～11月上旬頃に道東沖で漁場が形成されます。道東沖の漁場は、2013年には10月中旬～下旬の非常に短い期間、主に沖合寄りを流れる親潮（親潮第2分枝）に沿って形成され

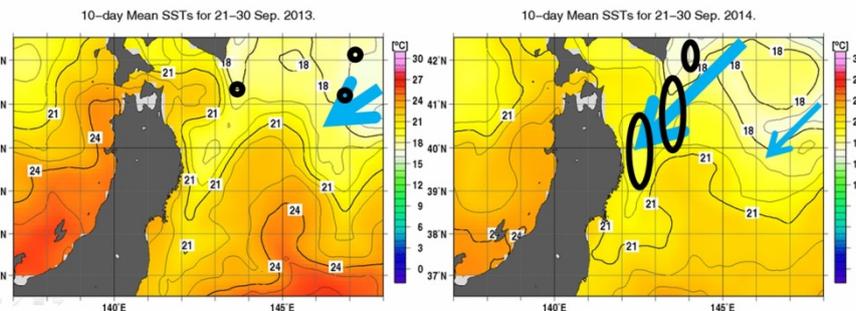


図2 2013年と2014年における9月下旬のサンマの漁場形成（気象庁による図を改変）

黒色の丸（○）はサンマの主漁場を、青色の矢印（←）は親潮の流れを表す

ましたが、2014年には前年より長い9月上旬～10月下旬の期間、主に沿岸寄りを流れる親潮（親潮第1分枝）に沿って形成されました（図2）。

2014年の道東海域（北緯42～43度、東経143～146度）の海面水温は、道東沖の漁場形成期間の中盤にあたる9月下旬では15～18℃でした（図2）。これは平年より0～2℃高い状態でしたが、前年より0～2℃低い状態であり、このことが前年との来遊の違いをもたらした可能性があります。

北海道の水揚量は、8月中は少ない状態が続きましたが、9月から上向いて11月30日時点で10.3万トン（前年比115%）と前年をやや上回りました。本州は11.5万トンと前年比200%で大幅に増加し、全国では21.7万トンと前年比148%でした（全国さんま棒受網漁業協同組合の調べ）。

魚体については、9月上旬～11月上旬に釧路港に水揚げされたサンマは、この期間を通して体長29cm以上の大型魚が多く、特に体長30～31cm台のものが多くなっています（図3）。このため、大型魚の割合は、2013年は60%でしたが（平成26年度北西太平洋サンマ長期漁海況予報より）、2014年はこれより高くなることが予想されます。

この様に、今年は漁況予報通りの漁で推移しました。

○ 来年以降の動向について

2010年以降、全国の水揚量が低い状態が続いているだけでなく、盛漁期も遅くなり、期間も短くなっています。北太平洋における来遊群の資源量を詳しく見ると、東経162度より東の日本から遠い海域では大きな変動はありませんが、それより西の日本に近い海域だけで大きく減少しています。このことは、全体の資源量の減少だけでなく、漁期初めに来遊する魚群の資源量も減っていることを示しています。したがって、このような資源量の減少と分布の偏りが、水揚量の低下と盛漁期の遅れと短縮をもたらしたと考えられます。このため、近年見られている漁期前の分布が今後も続くかどうかを、来年以降も注視する必要があります。

（釧路水産試験場 調査研究部 稲川亮）

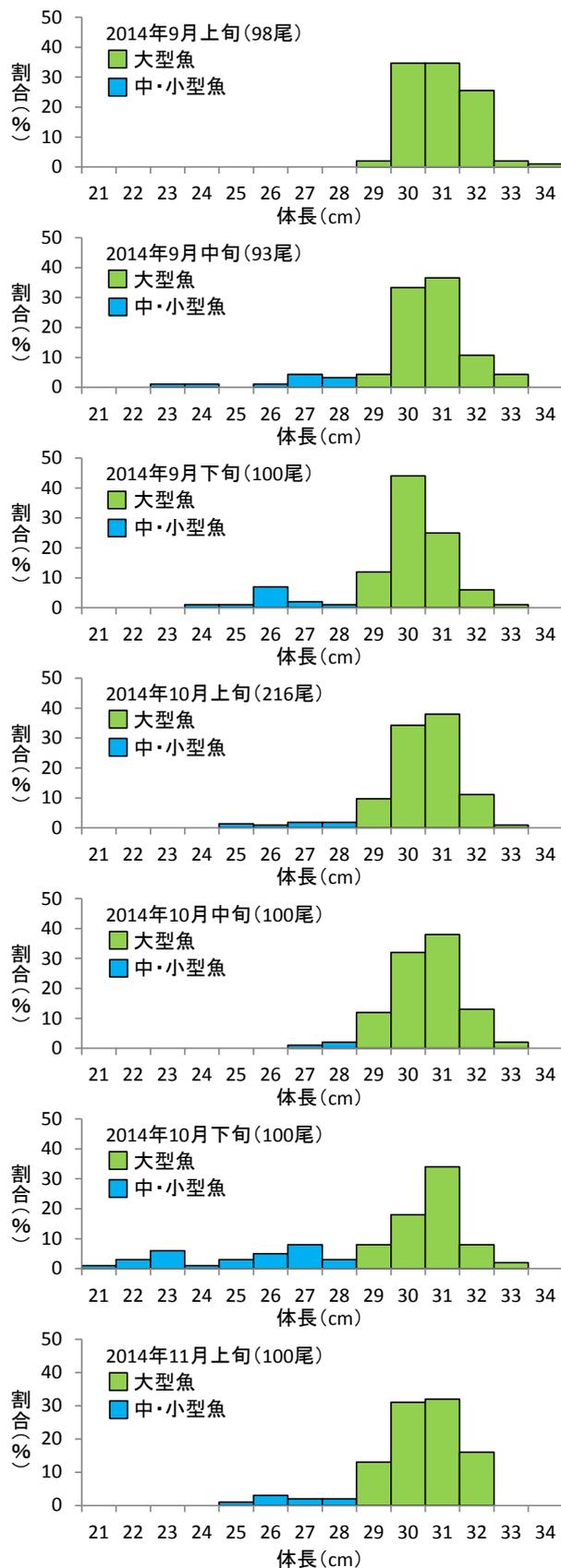


図3 2014年に釧路港へ水揚げされたサンマの旬別体長組成